

高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価：京都大学教育学部「教育研究入門」における実践(1)

○服部憲児（京都大学大学院教育学研究科）

山田剛史（京都大学高等教育研究開発推進センター）

はじめに

京都大学教育学部では、特色入試の実施に合わせて、これまでリレー講義方式で行われてきた1回生配当の必修専門科目「教育研究入門Ⅰ」を、探究型の授業へとリニューアルを行った。その主たる目的は、探究型学習のラインを繋ぐことにある。すなわち、一方では、高校においても探究活動が多く導入されるようになり、また従来型の筆記試験のみによらない特色入試が導入され、他方で、以前から2回生以上については少人数の演習科目や卒業論文といった主体的な学びが行われていることから、1回生にそれを導入することによって高校教育・大学入試・大学教育の接続・一貫性を図り、主体的な学びを涵養することを目指すものであった。本報告においては、このような意図をもってリニューアルされた「教育研究入門Ⅰ」について、授業そのものに加えて、関連する諸事項も含めた設計について紹介するとともに、授業の実施者の立場として、その範囲で得られた情報・データ（授業中の様子、学生のコメント、授業評価アンケートの結果など）から、今時のリニューアルの成果および課題について考察する。

1. 「教育研究入門」について

「教育研究入門」はⅠとⅡに分かれており、それぞれ前期・後期に配当されている。いずれも教育学部1回生配当の必修専門科目である。平成27年度までは、Ⅰ・Ⅱともに教育学部の3つの系（現代基礎教育学、教育心理学、相関教育システム論）の教員各1名が、それぞれ4～5コマずつ担当するリレー講義形式であった。このうち、Ⅰについては上記の理由から大幅にリニューアルを行うこと、Ⅱについてはアクティブラーニングの要素は取り入れつつも、旧来の枠組も残す形で実施することとした（本報告はⅠを対象とする）。

本授業は「研究を深めれば深めるほどわからないことが見えてくる経験を通して、その後の専門的な学びへのモチベーションを高めること」を目的としている。各回の内容は右表の通りである。

教員3名とTA6名の体制でティームティーチングにより授業を実施した。受講生を5名ずつに分け、適宜必要な指導を行いながら、各班でテーマを設定して探究活動を行った。4～5班ずつを教員1名とTA2名でサポートした。

I. オリエンテーション	1. 授業概要の説明、担当教員より研究テーマ・方法例の紹介(4/12)
	2. 調査・研究法入門講座・必読文献の紹介(4/19)
II. グループ別活動	3. グループごとにテーマの議論・研究課題の設定(4/26)
	4. グループ別活動1: 調査、第1回検討会用レジュメ作成(5/10)
	5. グループ別活動2: 調査、第1回検討会用レジュメ作成(5/17)
III. 第1回検討会	6. 現代教育基礎学系グループの発表と検討(5/24)
	7. 教育心理学系グループの発表と検討(5/31)
	8. 相関教育システム論系グループの発表と検討(6/7)
IV. グループ別活動	9. グループ別活動3: 追加調査、ポスター作成(6/14)
V. 第2回検討会	10. 現代教育基礎学系グループの発表と検討(6/21)
	11. 教育心理学系グループの発表と検討(6/28)
	12. 相関教育システム論系グループの発表と検討(7/5)
VI. グループ別活動	13. グループ別活動: ポスター完成(7/12)
VII. 全体発表会	14. ポスター発表形式で発表(7/19)
フィードバック	15. フィードバック(8/2)

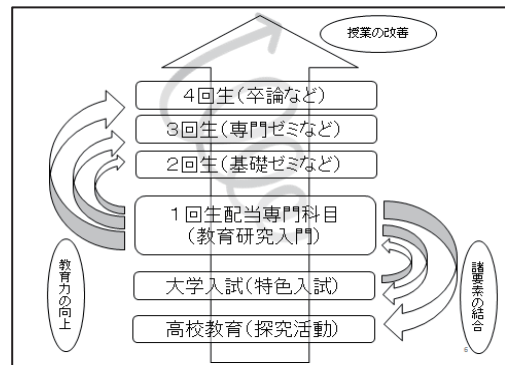
2. リニューアルにあたっての工夫

本授業のリニューアルにおいては、上記の高校教育・大学入試・大学教育の接続・一貫性に加えて、(1)教員等の教育能力・意識の向上、(2)様々な資源の連結と有効活用、(3)エビデンスに基づく検証と改善を考慮に入れて設計を行った。

(1)については、教員の教授技術・能力の向上(アクティブラーニングの経験、他の教員の工夫を知ることなど)、授業担当外教員の関わり(リニューアルの過程やデータ収集における関与、担当外教員の見学など)、TAの教育能力の向上=プレFD(TA研修、プレゼン・少人数指導などの実施、教員との情報共有のための進行メモの作成など)を組み込んだ。

(2)については、本学部は小規模の学部であり、人的資源が限られているという現状から、様々な活動・作業を有機的に連関させることを意図したものである。具体的には、特色入試問題の活用(これを手がかりに問題を展開)、オープンキャンパス・特色入試説明会との連動(オープンキャンパスでの研究成果の披露、入試説明会等の補助など)である。

(3)は、長期的な視野に立って教育改善を図るために、高等教育研究開発推進センターとも連携して、改善のための基礎資料として各種データを収集し改善に資することである。具体的には、2016年度入学生アセスメントの実施、学生の生の声の聴取(特色入試追跡調査インタビュー、授業最終回での振り返り、レポート課題など)、教員・TAの感想など多角的な質的・量的データの収集を企図した。



3. 授業の実施

授業において各班が設定した研究テーマは、「日本のAO入試」、「家庭における第二次反抗期の子どもとの関わり方」、「女子大学の存在意義」など、多様で興味深いものばかりであった。テーマを深めるために行った中間検討会では、各班の報告後の質疑応答において次々と手が上がったり、コメントカードに多数のコメントが記述されたりするなど、主体的な授業参加が見られた。

まとめにかえて～成果と課題～

上述の「入学生アセスメント」以外のデータ(授業評価アンケートなど)を見るに、この授業に対する受講生の評判は高かったと言える。とりわけ充実した実施体制、探究の授業方法に対して評価する声が多かった。授業の中において、少しのアドバイスで学生が成長する場面(アンケートの手法など)もあり、FD的な観点からは教員やTAの成長にも繋がったと思われる。また、受講生たちは、授業を通して研究の難しさを実感しており、その悔しさや不満感が2年生以降の教育・研究の糧になることが期待される。

一方で、いくつかの課題も明らかになった。テーマや授業設計の見直し、学生の学習・生活実態への配慮、データの分析とそれに基づく改善(とりわけそれらを行う時間の確保)、授業の実施・運営に要するコスト(時間・予算)、継続性の問題(授業担当者は基本的に毎年入れ替わる)などである。また、将来的には他の授業への還元や、入試業務への還元なども考える必要がある。